

つどい

第 439 号
2025.5.1発行・豊中歴史同好会
責任者 小川 滋奈良市富雄丸山古墳出土の
盾形鏡と蛇行剣をめぐって(上) 西川 寿勝
女王卑弥呼の共立を邪馬台国畿内説ではなく、
近畿説で考える 森岡 秀人奈良市富雄丸山古墳出土の
盾形鏡と蛇行剣をめぐって(上)

元大阪府教育庁 西川 寿勝

一 はじめに

二〇二三年一月、四世紀中頃とされる奈良市富雄丸山古墳から長さ約六七センチメートルの盾形鏡と、長さ約二・四メートルの蛇行剣が発見されました(1)。いずれもこれまでに類例を知らない特異な大型品として注目を受けています(図1)。

富雄丸山古墳は前方後円墳ではなく、全長一〇九メートルに及ぶ全国一位の円墳です。奈良盆地北西部の古墳空白地帯に単独で営まれています。北東約五キロメートル

ルには大王墓を含む佐紀古墳群があります。佐紀古墳群も同時期の四世紀中頃から大王墓の築造がはじまります。

富雄丸山古墳の墳頂の主体部は割竹形木棺を粘土で覆う構造で、明治期の盗掘で副葬品が持ち出されました。天理参考館に三面の三角縁神獣鏡、奈良国立博物館に石製の模造品や腕飾類・鉄製の刀剣や矢尻などが伝わります。他にも江戸時代に三角縁神獣鏡が一面出土しており、古絵図にも古墳で「祭器・壺類散乱」が注記され、円筒埴輪の樹立も知られていたようです。

今回発見の盾形鏡と蛇行剣は、中心主体ではなく墳丘裾の埋葬施設から出土しました(図2・図3a)。棺内の副葬品ではなく、割竹形木棺を被覆する粘土に埋め込まれたものです。この古墳には張出し(造出し)があり、三段の平坦面をもちます。古墳の張出しが完成した段階で、円丘に最も近い最上段に新たな埋葬施設を掘り、木棺とともに盾形鏡と蛇行剣を埋め込んだようです(図3b・c)。

出土した盾形鏡と蛇行剣は発見後間もなく保存処理に移りました。出土時の写真・X線写真などが公開されたものの、実見・観察できる段階になく、割竹形木棺内部の調査も同年一〇月から行われるなど、調査成果に関する大方の情報が出そろったわけではありません。しかし、発見資料をめぐ